

# 御所まち

## 伝建通信

文化財課 富60・1608

### 第③回

#### 御所まちの歴史 ①中世の御所

「御所」という地名の由来は、葛城川に5つの瀬（五瀬）があったとする説や、孝昭天皇の「御諸（みむろ）」が御所になつたなど諸説ありますが、「御所」という地名が歴史資料上に登場するのは中世の頃になります。

鎌倉時代になると、いわゆる「大和武士」と呼ばれる在地の武士たちが登場し各地域で勢力を築いていました。有名なのが越智氏や筒井氏ですが、御所市にも榎原氏や俱利伽羅氏、吐田氏などの大和武士が存在しました。その内の榎原氏が、室町時代に「御所郷」という領地を持っていたことが当時の記録から分かっており、その御所郷こそが御所の起源であると考えられます。しかし、地名として確認はできるものの、当時の町並みの様子についてはよく分かっていません。

戦国時代になると御所は「御所庄」と呼ばれ、そこには一向宗（浄土真宗）の道場があったそうです。ところが、永禄12（1569）年に大和守護の松永久秀によって破却されてしまいます。

道場はすぐに再建されましたが、その2か月後に興福寺によって再び破却されました。この道場の詳細は不明ですが、支配者から二度にわたって破却されながらも、すぐに再建されたことから、ある程度の経済力を持った一向宗の集団が存在し、彼らによって集落が形成されていたことが想定されます。

一向宗は、「御坊」と呼ばれる寺院や道場を中心に町場を形成し、信者の農民や商人などを集住させました。このような町を寺内町と言います。一向宗は織田信長などの時の権力者と対立し攻撃の対象となつたため、寺内町には周囲に巡らした堀や土塁、見通しの利かない筋違いの道路などの防衛施設がありました。御所まちにも、西御所の北西部に道路をわざと曲げて見通しを利かなくしている「遠見遮断」と呼ばれる箇所があり、現在も見ることが出来ます。このような仕掛けがある御所まちは、戦国時代にあった御所庄の一向宗道場に起源が求められるのかもしれない。



御所まち（西町）に残る「遠見遮断」  
とおみしゃだん

外から中の様子が見えないように  
わざとクランク状にしています